

創立 50 周年記念号発刊にあたって

所長 清 水 良 一

統計数理研究所は「確率に関する数理およびその応用の研究を掌り、並びにその研究の連絡、統一および促進を図る」ことを目的として昭和 19 年 6 月 5 日に創立された。今年で満 50 年になる。この間、研究所の発展に伴って「統計数理」もその体裁、内容、使命そして名称、いずれも幾つかの変遷を経ている。

「統計数理」の前身である講究録は研究所設立後間もない、7 月 15 日に創刊された。ガリ版刷りの粗末な装丁ではあったが、終戦前後の一時期を除いてほぼ定期的に発行され、所員の研究成果などが欧文および邦文で発表された。第 2 次大戦中であつたにもかかわらず、当初から国際的なレベルの論文が掲載されていたことは注目しておいてよい。しかし、つい最近も小川潤次郎博士（統計数理, 41 (1993), 47-59）が指摘しているように、この当時の日本人の貢献が、英文で発表されたものですら、何故かしばしば無視されてきた。考えさせられる問題である。

昭和 28 年に、講究録は第 8 巻 12 号をもって廃刊となった。同年統計数理研究所彙報が発刊され、講究録は昭和 25 年から不定期に刊行されていた輯報とともに、その使命を彙報に託したのである。当時の佐々木達治郎所長は彙報発刊の意義を

統計数理研究所は発足以来今や満九年、統計学の急速なる発展の渦中にあつてその地位がようやく江湖に認めらるるに至つたのは所員各位の努力による研究が、Annals、講究録及び輯報に発表された結果なることを思へば、これ等の研究発表雑誌を整備しその内容、体裁を改善することは有意義のことと信ずる。然るところ講究録及び輯報は従来謄写印刷であつて印刷不明瞭、校正も不備で読者に不便であつたと思うので、これ等を活版印刷とし、且つこの両者を合せて統計数理研究所彙報と名づけた。

と述べ、さらに

研究に際しては発展しつつある理論の追及によって時勢に後れないことは必要であるが、現象に関する知識の把握に勉め理論の方向を過らないようにすることが肝要である。かくして立派な論文をもって彙報紙面が飾られることを望む次第である。

と結んで新しい彙報に大きな期待を寄せている。以後、彙報は欧文誌 Annals と共に所員の研究成果を掲載して、統計学の発展とその普及に尽した。

彙報は和文誌であるという特性を活かして、日本における社会調査法に関するさまざまな試み、経済現象に関する実証的研究など、研究所主導の研究成果の発表の場としての役割を果たした。彙報は同時に統計数理とは何か、その果たすべき役割は何か、統計教育は如何にあるべきかなどの重要問題を論じる場を与え、さらに、統計数理のさまざまな分野の原著論文のためにも、発表の機会を与えて来たのである。

昭和 60 年 4 月に研究所が大学共同利用機関に改組転換されたのを機に、彙報はその名を「統計数理」と改めた。研究所創立 40 周年記念号を発行した翌年である。改組転換の意義と課

題については、当時の林知己夫所長が改題第1号の巻頭で詳しく論じ（統計数理, 33 (1985), i-iv), とくに

新しく国立大学共同利用機関として出発した統計数理研究所の使命は、全国の関係研究者の交流・協力の場とし、共同研究・共同利用を推進するとともに、研究者の養成、情報の提供、国際協力の推進等の機能を果たしていくことにある。

と述べている。共同利用という考え方は、漠然とした形ではあったが、研究所設立の目的の中に既に盛り込まれていた。改組転換はそれを明確に、制度として定めたものである。

これより先、1970年台からは研究成果の発表の機会が大幅に広がり、所員は国際的な学術誌に積極的に投稿するようになった。「統計数理」の役割が講究録が果たしたものと違ってくるのは当然であろう。「統計数理」は掲載すべき論文、その他の記事の種類を明確に示し、その中に研究詳解および共同研究報告を取り入れた。このことは統計科学が極めて広い分野をカバーしている、という事実とも無関係ではない。統計的方法は、それ自身が既に万人が納得するような、共通の統一理論を持つものではない。その基礎にある確率の考え方や、情報の抽出方法、得られた情報の意味付けなど、方法論の上でも、意見の対立がある。広い対象分野をかかえている統計科学にとって、その多様性は必然的といってよい。研究詳解と共同研究報告はこのような状況を踏まえ、より多くの人たちに統計科学の広さと、楽しさと、そして多様性を知ってもらうために設けられたものである。

研究詳解は高度に専門的なことを、他の分野の人にも理解出来るよう、分かりやすく解説したものであって欲しい。より多くの人に理解され、関心を持ってもらうことは著者としても悦ばしいことではないだろうか。また、共同研究報告については、得られた結果の記述もさることながら、さまざまな研究分野の人たちの、統計的方法との出会いがどのようなものであったか、既存の統計学のもつ問題点を如何にして克服していったか、そういう創造のプロセスの解説があれば有益であると考えている。それはしばしば若い研究者にとって大きな刺激となるであろう。批判的な読み方もあり得る。それはそれで、双方にとって貴重な経験となる筈である。「統計数理」が統計科学に関する諸々の意見の交錯する、討論の場になることを期待したい。